古道調査・秩父往還（三峰口駅・巣場新道～強石～杉ノ峠～落合）下見調査報告書

2021.11.24

日　時　：令和３年 11 月 20 日（土曜日）

メンバー：L.松本敏夫、古川史典、小原茂延、宮崎　稔、宮川美知子、山崎保夫、浅田　稔、本村貴子（計８名）

11 月 20 日（土）：晴れ

コース記録：

秩父鉄道・三峰口駅（9:30 - 9:40）～巣場新道入口（分岐）（9:47）～東屋（9:53）～斜面崩壊防止の大型砂利パック（9:58）～二瀬ダムの土砂置場（10：09）～馬頭尊（10:16）～巣場と強石との分岐(10:21)～万年橋（10:22）～国道 140 号に合流（10:28）～道標「御岳山登山口入口」（10:31）～道標「御岳山」及び左に旧三峯山道（10:33）～道標「秩父御岳山」・山道分岐（10:36）～道標「御岳山－強石バス停」（10:38）～地蔵尊と石碑（10:39）～道標「御岳山－強石バス停（10:41）～道標「御岳山－強石バス停」（10:53）～道標「強石バス停に至る－御岳山に至る」（10:54）～道標「秩父御岳山」（10:59）～車道を左折（石段を登る）（11:01)～道標「御岳山」（11:08）～「秩父御岳山登山コース案内図」・道標「御岳山」（11:10）～「巳待塔・奉待月天子供養塔（享保九年銘）・山の神の石祠」（11:13）～道標「強石に至る－御岳山に至る」（11:17）～杉ノ峠・道標「御岳山へ至る－落合へ至る－強石へ至る」・山の神の祠及び地蔵尊（11:54）～落合方面へ少し下った林道（森林管理道御岳山線）で昼食（12:05 - 12：26）～道標「御岳山－落合」（12:37）～貯木場（？）前の林道（森林管理道杉ノ峠道）（12:37）～貯木場上部の道標「落合下り道」及び「御岳山 2.3km、2 時間 10 分－落合バス停 1.3km､35 分」（12:40）～丸木橋（12:48）～道標「落合へ至る－御岳山登山口」（12:50）～丸木橋（12:56）～道標「御岳山登山口」（12:58）～落合地区の「地蔵尊」､「諏訪神社・意波羅山三社宮」（13:11）～普寛神社（13:15－13:21）～大滝温泉・秩父市立大滝歴史民俗資料館（13:30-14:00)、西武観光バスで三峰口駅（14:15）

記録

埼玉支部の山岳古道調査プロジェクトとして、前回は、秩父往還の贄川宿から猪鼻経由で強石までを調査しました。旧荒川村・猪鼻と旧大滝村・強石との村境にある土壇場地蔵から、上強石に向う旧秩父往還は古道の痕跡が消失していたため、以降の調査を断念し、土壇場地蔵から国道 140 号（白滝橋）に戻りました。そのため白滝橋からは、歩道が設置されてない国道 140 号沿いを強石まで歩きました。しかし、この間の国道は交通量が多く道幅が狭いため、古道歩きには適さないと判断できます。そこで今回は、三峰口駅から荒川右岸にある巣場新道で強石に向い、上強石から秩父往還を辿って杉ノ峠に登り、さらに落合に至る旧秩父往還を調査することにしました。

新編武蔵風土記稿の秩父郡・新大瀧村・強石組の条に「中央に荒川の流れ一條西より東せり、北岸にそひし一路あり、この路は新古大瀧村にかかり、栃本の口留番所を経て、雁坂峠

に達し、甲州へ通ふ往来なり、・・・荒川の中流及び山根等にも、巨石嶮岩ことさら多く峙立せり、強石の地名もここに權興するなるべし、」と記され、江戸時代には既に荒川左岸に生活路があったことが分かります。また、強石の地名の由来も説明されております。しかし、杉ノ峠越えの秩父往還については言及がありません。明治 43 年測図 5 万分の 1 地形図「三峰」には強石から大達原経由で落合に続く道路は確認されますが、猪鼻から上強石、杉ノ峠を経由して落合に下る峠道は記載されていません。杉ノ峠を越える旧秩父往還が最も頻繁に利用された時期が調査できれば、秩父往還に関する理解が深まり、興味深い情報が得られるものと考えられます。

秩父鉄道・三峰口駅に集合後、駅前の懐かしい街並みを左手に見ながら白川橋方面に向い出発しました。一方、参加者の別動隊（3 名）は、白久の渡し、中津川沿いの宮平にある旧秩父往還の入口周辺、中双里などの調査を分担しました。

三峰口駅前

白川橋へ

巣場新道への分岐（前方）

白川橋の手前左側に巣場新道が荒川右岸へと分岐しますが、道標が設置されていませんので、地図で現在地の確認が必要です。巣場新道（舗装された幅 4～5mの車道）に入ると、左手の山側は急な斜面が迫り、太陽の光が差し込まず下部は高さ 2mを越える擁壁で覆われています。右側は荒川の深い渓谷を隔てて、対岸は朝日を浴びて紅葉が明るく輝く猪鼻地区です。巣場新道に入って間もなくサルの親子が数匹、路上に集まっていました。人慣れしてないのか、あっという間に斜面の藪の中へと逃げてしまい、ガサガサと音が聞こえるのみでした。豊かな自然が残されていると実感できます。

巣場新道入口付近

巣場新道

巣場新道とサル

新道の右側に東屋があり、荒川の対岸は猪鼻の家々が国道 140 号の白いガードレール越しに散見されます。左側の斜面が急なためが斜面崩壊防止の黒い大型砂利パックが三段に積まれているのが、地形の厳しさを物語っています。ほとんど高低差のない巣場新道を進むと、二瀬ダムの広大な土砂置場が右手下方に現れます。かつては老人ホームの施設があった

とのことですが、今は更地になっていて駐車場跡が確認できるのみです。荒川を挟んだ対岸は旧荒川村猪鼻と旧大滝村強石の村境である白滝橋（白滝沢または猪鼻沢）が確認できます。

東屋

斜面崩壊防止の大型砂利パック

二瀬ダムの土砂置場

道標・石碑・石仏などが全く残されてない巣場新道でしたが、左側急斜面の下に馬頭尊の文字塔（背面に明治の文字）があります。今にも背後の急斜面からの落石に埋まりそうな状況です。右側の送電線の鉄塔の隙間から、大滝発電所の送水管が確認できます。

馬頭尊の調査

馬頭尊（文字塔）

鉄塔の奥に大滝発電所

この先は巣場地区（左側）と強石（右側）との分岐で道標「巣場 0.4km－御岳山 4.4km」がガードレールの上に顔を覗かせています。巣場新道は大陽寺参詣道として、秩父往還との分岐である「白久の渡し」への道から左に分れ、現三峰口駅の前を通って巣場から大血川の大陽寺入口に向かう道があったようです。しかし、現在は巣場の先は行き止まりです。右折して荒川に下ると今が盛りの紅葉に覆われた万年橋です。万年橋から荒川の上流を見ると大滝発電所が、下流は荒川の美しい渓谷が望めます。

巣場新道と強石の分岐

万年橋

万年橋から大滝発電所

一方、道標を左折して巣場地区の家並みの最奥部に進むと左側に有名な双体道祖神があります。巣場の双体道祖神の説明板には「秩父市指定有形民俗文化財　巣場の双体道祖神　所在地：秩父市大滝 241 番地　指定年月日：昭和 45 年 11 月 3 日　道祖神は、外からの疫病

や悪霊を防ぐために集落境等に造立される。また、旅の安全や縁結びの神としても信仰される。地元では『ドウロクジン』とも呼ばれる。この道祖神は板碑型で、高さ 47cm、幅 26 cm、厚さ 17cm、石質は砂岩で、切石の基壇に座している。碑面には、男神（向かって左）、女神（右）が浮彫されている。造立年代は江戸時代中期とされている。　平成 21 年 3 月　秩父市教育委員会」と記されています。大滝村誌に「巣場の双体道祖神（村指定文化財）　双体道祖神石像は信州系の信仰を伝えるものとされ、秩父地方には主要街道沿いに数体確認されている。本村内では巣場に一体あるだけで、ほかの地区には見られない。旧大陽寺参詣道の石標がある荒川村白久にも一体ある。白久から巣場へ通じる旧道の上・下に二体あるので何かいわれがあるのかもしれない。」と信州と秩父との交流を窺わせる興味深い内容が記されています。予想外に小さな道祖神の浮彫は巣場地区の最奥部に設置されていることから、かつての村境に設置されたものと推測されます。

巣場の家並み

双体道祖神

双体道祖神

万年橋を渡った右手に「砂防指定地　強石沢　この土地の区域内において宅地造成、家屋の新築、土石採取等の行為をする場合は、土木事務所長の許可が必要ですから、秩父土木事務所（Tel：0494-22-3751）にご相談ください。」の注意が掲げられています。不安定な地形であることが推測されます。また、国道 140 号への狭い歩道（御岳山登山口入口の分岐への近道）が沢の西側に残っていました。

砂防指定地の看板

御岳山への近道

国道 140 号との合流点

国道 140 号に合流後右折して、強石の街並みを数分猪鼻方面に歩くと左側に道標「御岳山登山口入口」がありますので、この分岐を左折します。左側に強石の説明板があり「秩父多摩甲斐国立公園及び大滝の玄関口である強石は大正時代に県道が開通された頃から物資が集まる交通の起点として大いににぎわいを見せた。馬車の発着点、木炭の問屋、銀行の支店、飲食店、菓子店、旅館などあらゆる種類のお店が軒を連ね、昭和 40 年代までこのにぎわいは続いた。現在は、宿が 1 軒営業し、ほぼ生活の場となっている。強石は巨大な岩石が多

く、落石があり交通の難所であったため名づけられたといわれている。」と記され、かつて物資の中継所として賑わった強石の写真や杉ノ峠への登山ルート詳細図が掲載されています。現在の国道沿いの強石はひっそりとした街道筋で、昔の面影を残すものは古い商家のみです。

御岳山登山口の道標

国道 140 号と強石

強石の説明板

車道を上強石方面に向かうと右側に道標「御岳山」がある T 字路があり、左折すると旧三峯参詣道で「源流の郷伝言板・標高 338m」があります。今回はこの T 字路を直進して上強石に向います。石垣の上に置かれた道標「秩父御岳山」の分岐を左折すると車道から山道に変ります。茶畑の横にある道標「御岳山－強石バス停」を過ぎると、新しい小堂に納められた笠の付いた四角い石碑（前に丸い石が置かれている）と蓮華座の地蔵尊坐像があります。前述の強石の説明板には「足を良くしてくれるお地蔵様」と記されていますが詳細は未確認です。

旧三峯山道への分岐

秩父御岳山への分岐

地蔵尊と石碑

その先に道標「御岳山－強石バス停」があり、瀧石神社の横から上強石に向かう車道に合流します。眼下に強石の家並、遠方に山間の巣場が望め、巣場地区の背後に光岩（聖岩）が確認されます。車道を進むと道標「御岳山－強石バス停」があり、先ほどの地蔵尊の左側の道と合流します。道標「強石バス停に至る－御岳山に至る」を左折すると左側に青い鉄パイプとネットがある登山道となります。

瀧石神社からの車道に合流　　強石と巣場の眺望　　登山道

道標「秩父御岳山」を左折する場所に白い手製の看板「ご注意　山に行くときはできるだけ一人でなく二人以上で・・・、家の人に行く先や帰り時間を話して下さい。こんな山と思っても、きちんとした履物で、服装も動き易い身仕度で、手拭いなども忘れずに・・・、時間がかかると思ったら、携帯食品や飲料水も用意して。応急品も持ちましょう。秋の山は、枯草や落葉などで地面がうずまっていますから。足元に十分気をつけて・・・、枯木や枯草にたよらないで・・・、熊やいのししなどに合わないように大声で話したり笛を吹いたりしましょう。蚊にも充分気をつけましょう。秩父警察署・大滝村」があります。警察署の看板とは思えない柔らかい表現や図柄です。車道の左側に斜め上方に登る石段があり、右は緑のフェンスになっています。

車道から登山道へ　　秩父警察署の看板　　車道から登山道へ

道標「御岳山」に従い右に車道を進みます。この先、道標「御岳山」の分岐が左側にありますが、ここを登ると土壇場地蔵から続く旧秩父往還の出口はショートカットされてしまいますが、秩父往還の旧道入口に合流できます。また、強石の分岐にあった類似の案内板「秩父御岳山登山コース案内図　秩父御岳山は、普寛行者の開山で、山頂は普寛神社の奥宮で御岳大神がまつられています。もともとは山岳修行の山でした。・普寛行者：木曽御嶽山の王滝口を開山。王滝口は郷里大滝の字音をそのまま名づけられています。享保 16 年（1731）落合に生まれました。三峰山で天台・真言の奥義を極め、修験者として諸国を修業しました。普寛神社は普寛行者を祀っています。　秩父市大滝総合支所・地域振興課」があり、旧大滝村落合で生まれた普寛行者の経歴や登山コースを確認することが出来ます。

上強石の集落

御岳山への分岐

秩父御岳山登山コース案内図

林道・上強石線終点の青い道路標識と「通行止め」標識の先に進むと、左上に鮮やかな紅葉の奥に廃屋があり、右下のケヤキの大木の枝に梵鐘（半鐘かも？）が吊り下げられています。車道で廃屋の後ろに回り込むと、車道の右に少し入った登山道の上方に落葉に埋もれながら佇む「巳待塔（宝暦四年（1754）「秩父甲州往還」参照）・奉待月天子供養塔（享保四年（1719））・山の神（「秩父甲州往還」参照）の石祠」があります。ここが猪鼻の土壇場地蔵から続く、かつての秩父往還の上強石側の出口になります。なお、写真のキャプションにつけられた番号（No.）は、歴史の道調査報告書「秩父甲州往還」につけられた文化財等の No. に一致します。また、「秩父甲州往還」には、「享和三年（1802）の『瀧之橋幷に馬頭観世音勢至菩薩　建立奉加帳』の文章の中に『大瀧の行路二道ていえとも、往昔杉の峠はかり往来致と傳へきく、今の三峯山道をはぐれと相唱へて、當瀧の橋ハ笹行橋とて、丸木徒渡りにて道すら細く、是を助くる杖の突き所もなしされば、両山日夜繁栄して、自然巌窟を切廣め牛馬通行をこえ』とある。杉の峠の方が往来が激しかった時代があったが、強石から大達原を経由する道は、大陽寺や三峰山への参詣道として拡張されたことがわかる。」と記されています。これらの内容から、江戸時代の中期以前までの秩父往還は、荒川沿いの危険な道よりも、比較的安全な生活・交易路であった杉ノ峠越えが、利用されていたものと推測されます。

上強石最上部の廃屋

梵鐘（半鐘？）

秩父往還の日待塔など（728）

車道を進むと左側に水道施設（未確認？）があり、その先左側に道標「強石に至る－御岳山に至る」があります。ここが先ほどの巳待塔等から続く秩父往還で、杉ノ峠への本格的な急登の入口です。黄色い看板に熊の絵と共に「熊出没注意」が、また別の看板には「注意：山道では、思わぬ危険が起こりがちです。通行中は常に充分な注意を払って転倒・転落等の事故防止に努めて下さい。尚、大雨の時や冬期間（12 月中旬～4 月上旬）は危険ですので通行を禁止します。秩父市」と記されています。秩父御岳山登山コース案内図があった先ほど

の分岐から直接ここの登山道入口に至ることも可能です。

水道施設？

杉ノ峠への分岐

旧秩父往還

ここからの秩父往還は尾根上をジグザグに急登します。古道の状況は明瞭で「御岳山」や「落合」の標識、ピンクのテープなどが杉の大木に括りつけられていますが、道幅が狭く、古道と言うよりは登山道がピッタリの急登に驚かされます。登山道の右側に炭焼き窯の痕跡が確認できます。樹齢は百年近くになるであろうか枝打ちされた見事な杉の植林帯を数十分間、一気に登り切ると、以降は山腹を巻きながら緩やかな登りに変わります。

炭焼き窯跡

旧秩父往還

杉林の中の旧秩父往還

前方に一段と太い杉の大木が現れると杉ノ峠です。道標「御岳山へ至る－落合へ至る－強石へ至る」及び「御岳山登山コースの詳細絵図」が峠に設置されています。尾根を登るルートが秩父御岳山への登山道で、峠を越えて反対側に下るコースが秩父往還です。杉ノ峠には、杉の大木の根元に壊れて屋根のみ残された「山の神」（？）の祠があり、祠の前の素焼きの小皿の上やその周辺に古い賽銭が多数置かれています。祠の下には「・・休憩所」の文字が残る朽ち果てた板片が埋もれています。その上方に素朴な感じの苔むした地蔵尊があり、前に小石がうずたかく積まれています。これも信仰のなせる業なのかもわかりません。地蔵尊の後には壊れた社の屋根の残骸が確認できますが、かつての社の情景は想像できません。「秩父甲州往還」には、「杉の峠に到着すると、峠には、現在休憩施設として東屋がある。峠には地蔵と山の神が祀られている。・・・東屋から先の道は、山仕事をしている人が使うぐらいなので、昔の道筋の面影はみられない。植林してある中を 1.5 キロメートルほど歩くと林道に出る。この先の落合地区までの道筋は消失している。」と峠の状況が記されています。

杉ノ峠　　杉ノ峠の山神の祠（729）　　杉ノ峠の地蔵尊（729）

更に「秩父往還いまむかし」には、「上強石から杉ノ峠道へ入る所には巳待塔など石碑がある。峠道の旧往還はすぐに杉林へと入り、ジグザグにぐんぐんのぼって高度をかせぐ。道がゆるやかになると、東屋の休憩所のある杉ノ峠に着く。峠名にふさわしく、何本もの大杉にかこまれるように大山祇神、浅間様を合祀した小社と、自然石を利用して造られた地蔵仏が安置されている。・・・峠から杉の中の急な道を 20 分ほど下ると、下方に林道や落合の集落が見えてくる。」と記されています。地蔵尊の後ろの社は大山祇神と浅間様の社の残骸と思われます。この十年ほどの間に、峠にあった東屋は跡形もなく倒壊し落葉の下に埋もれてしまったようです。これらの両資料から、東屋は「山の神」祠の下方で落合へ下る尾根上（峠）にあったものと推測されますが、残骸は「・・・休憩所」の看板の一部を残すのみです。また、「秩父甲州往還」や「秩父往還いまむかし」に掲載の杉ノ峠の写真には、地蔵尊の背後に大山祇神と浅間様の小社が確認できますが、現在は屋根の一部を残すのみで、かつての小社は全く消失しています。また、峠から落合への旧秩父往還は「秩父甲州往還」調査時に既に消滅していたものと考えられます。

杉ノ峠から落合方面へ少し下った林道（森林管理道御岳山線）の日当たりの良い場所で昼食としました。林道を下ると道標「御岳山－落合」が右側にあります。更に林道を進むと大きな平場となった貯木場（？）前の林道（森林管理道杉ノ峠道）に合流します。道標「杉ノ峠経由御岳山」や「落合に至る」に従い林道を右折します。土砂で埋められた沢を右手に見ながら林道を左に回り込むと広い貯木場の上部に道標「落合下り口」及び「御岳山 2.3km、2 時間 10 分－落合バス停 1.3km、35 分」が設置されています。この分岐を左折して林道脇の登山道を下ります。

森林管理道御岳山線の道標　　貯木場（？）へ下る　　道標「落合下り口」

登山道をジグザグに急降すると、左側の沢に造られた堰堤が土砂で埋まってしまう状景

を目にします。同様の光景が繰り返し確認され、今後、秩父の里山や登山道の荒廃が危惧されます。丸太を三本並べて作られた古い橋を渡ると道標「落合へ至る－御岳山登山口」の設置された舗装道にでます。台風なのか豪雨の影響か不明ですが、舗装道の路肩が崩れ、ガードレールが押し流され、林道は土砂で埋められていました。

土砂で埋まった堰堤

丸木橋

道標「落合へ至る」

更に登山道を下るとまた小沢に架けられた丸木橋（一部破損ヶ所あり）があります。その先が舗装された車道で、朽ちかけた道標「御岳山登山口」が笹に囲まれて建てられています。

破損した舗装道

丸木橋

道標「御岳山登山口」

左側に沢とガードレールのある舗装道（森林管理道杉ノ峠線）を下ると、右側の石垣の上に木造の廃屋がありました。別荘とは考えられませんが、樹木に覆われて住居らしくもありません。

舗装道

舗装道

落合へ

前方に落合の街並みが木々の間から見え始めると、赤い小堂に納められた地蔵尊につきます。その左側のしめ縄が張られた社に「諏訪神社及び意波羅山三社宮」が並んで鎮座しています。普寛行者所縁の意波羅山は八海山や武尊山と同様に御嶽信仰の山岳霊場と考えられます。更に赤い鳥居の奥には「庵の沢稲荷」が一段と高い場所にあります。鳥居には、稲荷社・天神社・山神社が併記され、明治時代になって合祀されたものと推測されます。また、「秩父御岳山登山コース案内図」がここにも設置されています。

地蔵尊立像　　意波羅山三社宮など　　御岳山登山コース案内図

国道 140 号の手前右側に朱色の鳥居と普寛神社があります。入口は閉鎖され「新型コロナウイルス感染拡大防止のため神社境内への立入りを当分の間、禁止しております。普寛神社」の看板が立て掛けられています。鳥居の左側に説明板があり「御岳山（おんたけさん）　木曽御岳山の開祖、修験行者、普寛導師（ふかんどうし）が江戸末期に開いた山で、普寛は一般の人が霊山に登れなかった時代、古い習慣を打ち破り大衆登山を可能にした。普寛導師は大滝村の出身で、落合地区にある普寛神社は生誕の地である。（碑は県文化財史跡となっている。）各地に同様の山名が多いことから、秩父御岳山（ちちぶおんたけさん）」と呼ばれるこの山は低山（1080.5 メートル）ながら山頂の眺望は良く、春のカタクリ、秋の紅葉と手軽に四季を楽しめる山である。」と記され、カタクリの写真や御岳山登山コース図が載せられています。

普寛神社（748）　　普寛神社　　落合と国道 140 号

風土記稿には「落合組　西南の方より荒川の流一條来り、正西の方より中津川の流れ一條来りここにて尾合せり、里名これによる、・・・茲にて右すれば中津川村にかかり、信州への間道あり、左すれば栃本にかかり、雁坂峠を経て甲州へ通ふ一路あり、」とあり、十文字峠の道だけでなく、中津川をつめて三国峠から信州に至る道が江戸時代から利用されていたことが分かります。

石段の上に朱色の鳥居の奥に普寛行者の説明板が設置されています。現在は神社内に入ることはできませんが、約 10 年前に秩父御岳山から落合に下った際に普寛神社を訪れ、撮った写真があります。その中の説明板には「普寛行者（概論）　普寛行者。木曽御嶽山、越後八海山、上州武尊山、武州意和羅山などを開山・中興した木食行者。享保十六年（1731）武州秩父に生まれた。俗名、木村好八。はじめ江戸に出て仕官したが、明和元年（1766）三峰観音院に入り、普寛と名を変え本山派の修験者となった。天明二年（1782）から木食行を始め、諸国を遊行して数多くの霊山を開いた。まず三笠山（群馬県）と意和羅山（埼玉県）

を開いた後、寛政四年（1792）木曽に来て御嶽に登頂、王滝口登山道を開いた。翌年にも御嶽に登山するとともに、江戸を中心にして修験者の霞支配の方法を取り入れた御嶽講の組織化をすすめた。寛政六年（1794）には夢告により弟子を連れて越後に赴き、地元の行者泰賢とともに八海山を中興開山、屏風道を開いた。八海山はこれ以後、御嶽行者が相次いで訪れ、この地方の新しい山岳霊場として脚光を浴びるようになった。普寛は翌年、武尊山（群馬県）をも開山し、享和元年（1801）に武州本庄宿で没した。死後、普寛霊神と仰がれ、一般には御嶽の開祖、御嶽教の開祖と仰がれる。　修験道辞典。慶応大学教授　宮家　準編　東京堂出版より　平成十二年一月元旦宗教法人　御嶽普寛神社之建　監修　大滝村教育委員会」と記載されています。地蔵尊の横の神社には意波羅山三社宮とあり、説明板の意和羅山とは「波」と「和」に違いがあり、どちらも「わ」と発音しますが詳細は未確認です。

普寛神社から国道 140 号で大滝温泉・秩父市立大滝歴史民俗資料館まで歩き、西武観光バスの時間まで資料館を見学しました。大滝温泉は新型コロナウイルス感染症の影響で閉鎖されたままです。大滝温泉から予想外に大混雑の西武観光バスに乗車し、三峰口駅に戻りました。

国道 140 号から大滝温泉へ

秩父市立大滝歴史民俗資料館

上強石から杉ノ峠を越えて落合に至る旧秩父往還は、登山道としては標識や登山コース図などが完備され、よく整備されたコースです。しかし、杉ノ峠を越える秩父往還が最も栄えた時期には、馬の背中に炭俵・米・味噌・酒などの日用品を積んで、頻繁に行き帰りした道と考えられます。その観点からは、現在の秩父往還は、道幅が狭く、道のつけ方が急すぎるのではないかと思われます。更に、杉ノ峠を挟んだ両登山道沿いには、石碑・石仏・小祠などが全く確認できず、旧道の面影を実感できなかったことが残念です。しかし、既に日常での往来が途絶えて久しく、林道が山奥まで伸びた現状では、かつての秩父往還を確認するのは困難と推測されます。

一方、「白久の渡し」の下見及び「宮平の秩父往還入口」の確認、日本山岳会会員として大正・昭和期に画家として活躍した茨木猪之吉の「秩父槍岳 1938」のスケッチ場所と推測される中双里などを調査後、普寛神社で全員合流しました。今後の秩父往還の調査に有益な資料と考えられます。

白久の渡し調査

宮平の秩父往還調査

中双里から秩父槍ヶ岳

参考資料

○歴史の道調査報告書・第 11 集「秩父甲州往還」（編集・埼玉県教育委員会、埼玉県立博物館）、発行・埼玉県県政情報資料室、平成二年四月発行

○大日本地誌大系、新編武蔵風土記稿（第 12 巻）・秩父郡（古大瀧村・新大瀧村）（雄山閣）、昭和四十六年二月二十五日発行

○明治 43 年測図 5 万分の 1 地形図「三峰」

○大滝村誌（編集・秩父市大滝村誌編さん委員会）、発行・秩父市、平成二三年（2011 年）三月三一日発行

○飯野頼治著「秩父往還いまむかし」（さきたま双書）、平成 11 年 2 月 25 日発行

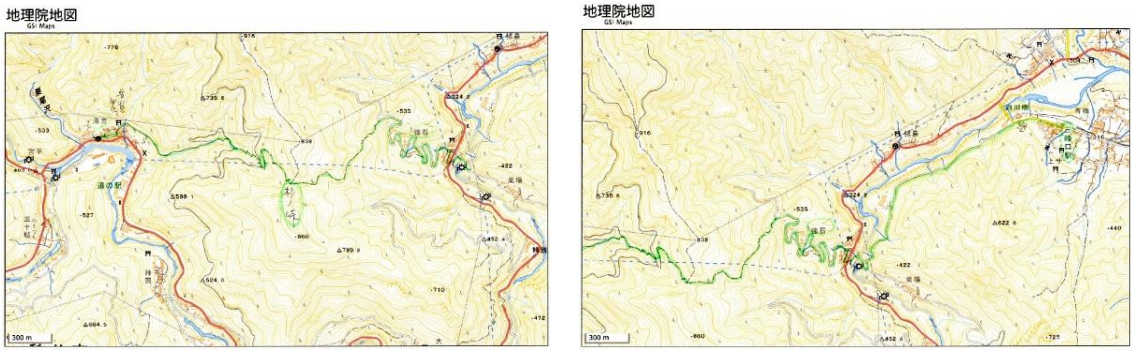
○飯野頼治著「地図で歩く秩父路」（さきたま出版会）、2006 年 12 月 10 日発行

○国土地理院（2 万 5 千分の 1 地形図）

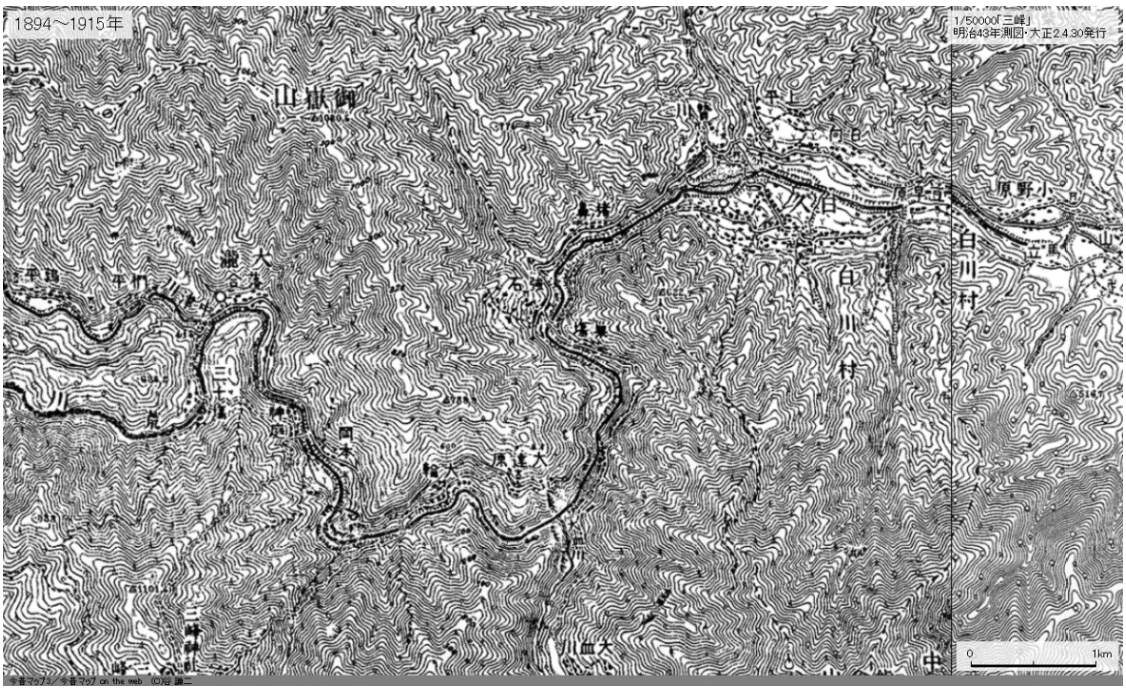
○GPS データ（YAMAP）

松本敏夫記

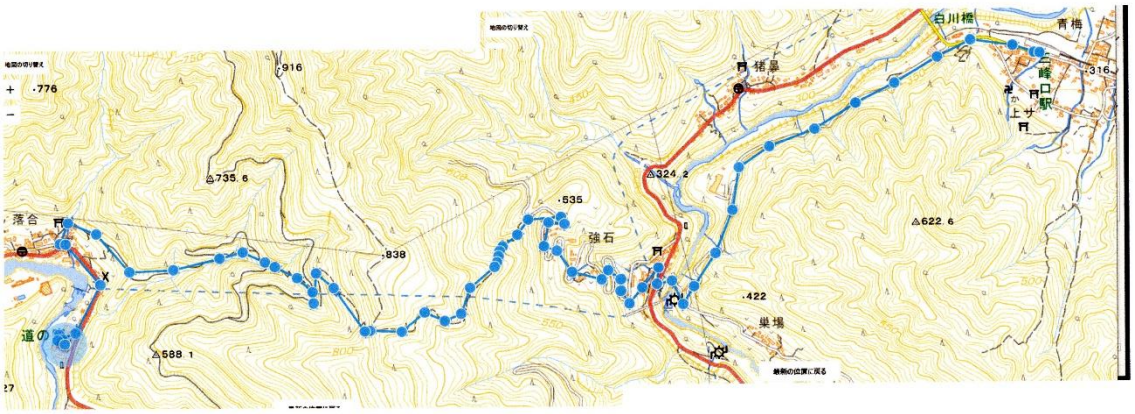
三峰口駅にて



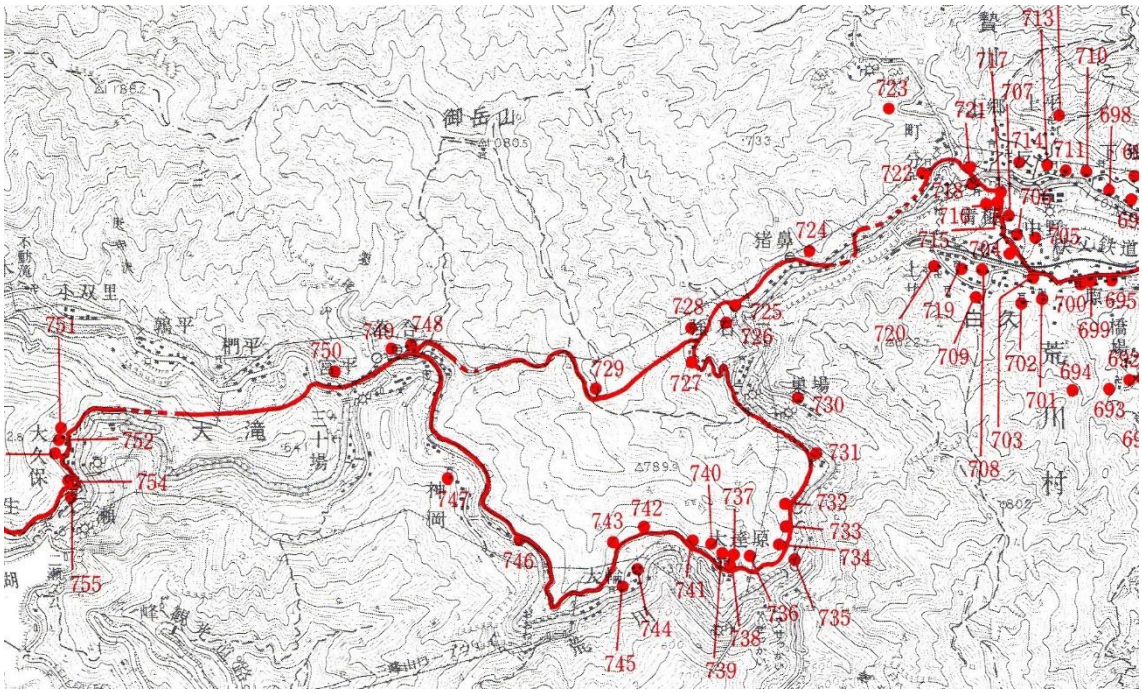
国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図「三峰」



明治 43 年測図・5 万分の 1 地形図



実際に歩いた GPS データ（YAMAP）



歷史の道調査報告書・第 11 集「秩父甲州往還」